



慶應義塾大学ビジネス・スクール

「12人の怒れる男」5

作者レジナルド・ローズについて

「12人の怒れる男」の原作は50分のテレビ・ドラマであった。作者のレジナルド・ローズは当時（1954年）新進気鋭のTVドラマ作家で、ニューヨーク地方裁判所で故殺事件の陪審員をつとめた体験をもとに執筆し、この作品はナマ放送で放出された。シドニー・ルメット監督で映画化もされ、ヘンリー・フォンダ、リー・J・コップの名演技で世界に紹介されて、作家レジナルド・ローズの名も海外まで知れることになった。授業で教材として使用するのが、この映画である。

「12人の怒れる男」はローズとしては珍しく個人的体験をもとに書いたものだが、密室内での審議、それによって決定される1人の人物の運命など、どれをとっても劇的な体験であり、作家の執筆欲をかき立てずにはすまないものであった。

もしこの作品が10年後に書かれていれば、12人の顔ぶれはもっと違ったものになっていたであろう。おそらく、少なくとも黒人と女性が何人か入っていた筈だ。54年の当時としては、富める者と貧しい者、アメリカを母国とする者とそうでない者、親と子の対立と断絶が背後に描かれている。人種差別はもちろん社会問題としては存在していたが、「12人の怒れる男」では触れていない。肌の色よりももっと基本的な「人間」に焦点を絞ったためであろう。

陪審制度について

アメリカ合衆国では、ある罪を犯したとして起訴された人物は、12名の人物が事実をきいた上で、その者が確かにその罪を犯したと判定しない限り、刑務所に送られることはない。この12名が陪審であり、陪審員である。陪審の目的は、個人が政府から不當に扱われ、身に覚えの

本補助資料は、高木晴夫教授がクラス討議の基礎資料として作成したものであり、映画「12人の怒れる男」に関する補助情報を与えることを目的としている。

本補助資料は慶應義塾大学ビジネス・スクールが出版するものであり、複製等についての問い合わせ先は慶應義塾大学ビジネス・スクール（〒223-8526 神奈川県横浜市港北区日吉4丁目1番1号、電話045-564-2444、e-mail: case@kbs.keio.ac.jp）。また、注文は<http://www.kbs.keio.ac.jp/>へ。慶應義塾大学ビジネス・スクールの許可を得ずに、いかなる部分の複製、検索システムへの取り込み、スプレッドシートでの利用、またいかなる方法（電子的、機械的、写真複写、録音・録画、その他種類を問わない）による伝送も、これを禁ずる。

Copyright© 高木晴夫 ('04年3月改訂, '08年9月改訂)